垂水史談会報

第 53 号
2023（令和５）年
１１月発行

【報告】

垂水中央中学校３年生

「ふるさと垂水」の史跡巡り

９月２０日（水）、垂水中央中学校３年生の約８０名が市内の史跡巡りを行いました。

バス３台に分乗して、お長屋、有馬邸、島津墓地、宇喜多秀家潜居跡、幕末の牛根造船所跡、近衛信輔腰掛石、櫻島焼亡塔、勝軍地蔵などを見学し、最後の新城地区公民館では西郷隆盛と勝海舟の掛け軸などを見ながら、幕末・明治の新城と西郷隆盛とのかかわりや地区民との交流を学びました。

とても残暑の厳しい一日でしたが、生徒たちが生まれ育った垂水の史跡を知る機会になったのではないかと思います。

（各史跡や文化財等の説明員として山田義之、川﨑あさ子、瀬角が参加）

垂水史談会現地研修

垂水史談会では、毎月第４日曜日に、市内にある史跡や文化財を訪ねて学ぶ研修を行っています。

これまで、７月２３日には牛根麓地区の埋没鳥居周辺、８月２３日には会員の川崎あさ子さんから大野地区の開拓の生活や学校の話を聴きながら開拓記念碑や大野小中学校跡、大八重神社などをめぐり、９月２４日は協和地区の「田の神さあ」３体や大隅線のトンネル事故慰霊碑など、１０月２２日は牛根二川地区で牛根中学校跡地、曹洞宗の喜翁院跡、宍籠の滝、西南戦争の招魂碑などを見学しました。今後もこの活動を通じて垂水の歴史や文化財を掘り起こしていきたいと思います。

―旧垂水海軍航空隊跡の特殊地下壕―

市の文化財保護審議会は保存を要望

令和４年１２月の垂水市議会に対して、大隅史談会による「垂水海軍航空隊のものとみられる防空壕保存・活用についての陳情書」が採択されました。

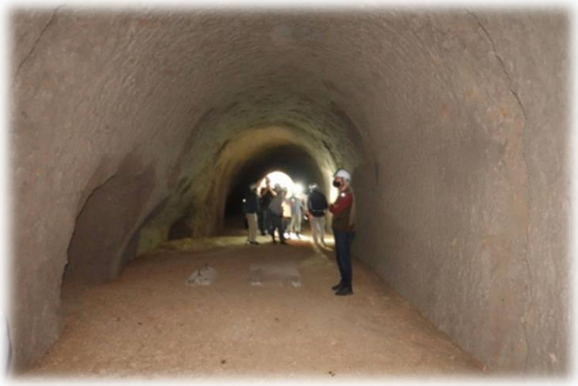
それに伴って、これまで保存方法を協議してきた垂水市文化財保護審議会は、１１月２０日の審議会において、工事関係者に対して、おおむね「住民の安心安全を確保する上で治山工事を中止することは出来ない。しかし、特殊地下壕は他に類を見ない規模で重要な戦跡であることから、３Ｄで記録を残すことはもちろんだが、後の研究ができるように地下壕の入口を完全に塞がない方法で工事を進めていただくよう強く要望する」ことで意見集約しました。

この特殊地下壕は、戦時中、垂水海軍航空隊が米軍の空襲を避けて任務遂行するため、現在の浜平の道の駅の東方のシラスの崖下に掘削され、その中で魚雷調整や訓練が行われた大規模な施設でした。大隅線の延長工事等の際、塞がれたものと思われます。しかし、永年の風雨等により、強度の弱い入口付近が陥没し、地下壕入口が地表に姿を現したもののようです。

特殊地下壕の調査を委託された業者によると、

・地下壕の縦坑最大高さ：３・６メートル、横坑最大高さ：２・６メートル。総延長：約２キロメートル以上。

・現存するひとまとまりの特殊地下壕としては九州最大規模。（最大規模は松代大本営の特殊地下壕）などの途中報告がなされています。



特殊地下壕は発見されたばかりで、詳しい調査はこれからであり、新しい発見も期待されます。住民の安全を確保することは言うまでもないことですが、一方、特殊地下壕の戦跡としての価値や重要性を評価しつつ、後世に残す手立てを図ることと同時に、市民や学校の子どもたちへの歴史教育の生きた教材として活用する取り組みが必要と考えます。

また、観光の面でも近くの道の駅との連携した活用も模索できるのではないでしょうか。

【垂水市史料集（一）】より

西南之役　私学校生徒の従軍譚　⑨

―立山健氏への聞き書き―　（山口栄之　筆記）

疾風のごとく殺到す

西郷先生の許しを受け、引き続き前軍として出発した。吉野の村役場の城戸にて隊を建て直し、今までの携帯品はことごとく捨て、ただ銃器と食器とのみを持つことにし、以て身軽にならしめた。そしてみな刀を抜けとて所謂抜刀隊と作ったのである。

八か月以前に出発した懐かしい故山、今眼前にありながら残念至極にも敵の陣地である。感慨無量、憤恨骨髄に徹し、一同これが奪還を心に誓い、歯を噛み肩を怒らし、勇躍前進して、勇壮な軍歌の声にも一層の力がこもっていた。

吉野の原から韃靼堂に降り、福昌寺門前、内之丸、浄光寺下と馳せ過ぎて高野山の下に出たかと思うと、驀然に私学校裏門へ突貫した。驚愕狼狽、守りを捨てて逃ぐる敵の後から味方の打ち振る白刃閃々として走り行くのを見るのみで、一発だも銃声を聞かず、たちどころに奪還占領するを得た。敵は米倉の方（小川町の赤倉の方）へ退却したが、そこから初めて発砲しつつ応戦するようになった。

逸見殿撃たる

官軍が米倉の方からしきりに射撃するけれども、こちらは石塀の陰で笑っている。するといい気になった若い人たち二、三人が石塀の上に登って大手を広げて嘲笑するので、そこに逸見隊長が現れ、「オイ、馬鹿らしいことをしてはイカン、そうして撃ち殺されては何にもならぬ。死ぬときは必ず一人以上の敵を倒さなければ」と言われたとき、カッと音がして隊長が後ろにバッタリ倒れた。頭から血が流れ出てみるみる面色蒼くなり、息は絶えてしまった。驚き駆け寄った仁礼何某等は叩き起こして口に宝丹を含ませ激叱して気を励まさせようやく蘇生せしめた。すると忽ち「愉快極まる陣屋の酒宴、中に益良夫の美少年」と歌いだして、隊長自ら気を奮わるるのであった。しかし、頭痛がひどいので、もう駄目と思われたか帯剣を外して、「これは先生のものであるから返上してくれ」と遺言めいたことを言われるので、また宝丹を食わせて励ましたところ、今度は「先生に会わせてくれ」と言い出されたから、皆で以て輿に乗せて送った。

逸見殿はこれまでに十二か所の負傷であったとやら、またいつも大野太刀を従者に担がせていられたそうであるが、いつどこで捨てられたか、その従者というのも今はいなかった。

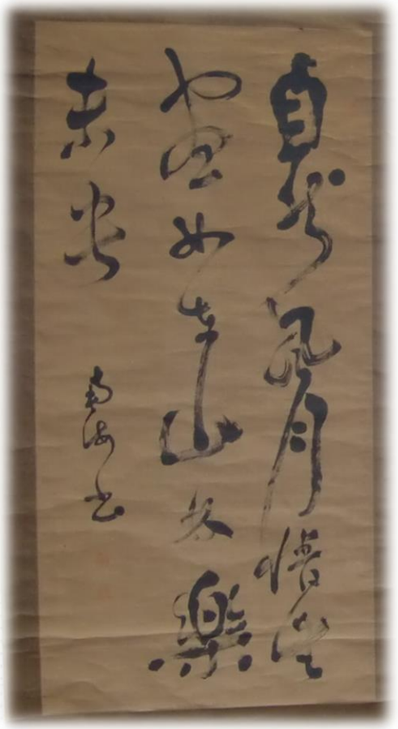
（薩軍兵士の軍装）

最後の軍使を見た

また官軍が城山に登った、という事で高野山の後ろから駆け上って行ってこれを追い払い、なお追撃して山を下り県庁まで行った。そしてそこから金倉に籠っている敵と互いに銃火を交えた。ここで自分は新しい服を分捕って着たが、それは海軍軍医の服であった。

一週間ばかりして県庁も火を掛けて仕舞った。そこには官軍の手負いなどが居たはずだが皆焼かれてしまったでしょう。それからは自分らは二之丸の内に引き上げていた。

八月十六日（新暦の九月二十二日）、山野田、河野（主一郎）の両氏が軍使として軍艦へ行かるるのを見た。引きまわしを着ていて白旗を振りながら出て行かれた。その翌日、河野氏は留められて山野田氏のみ帰って来て、「今晩かぎり降伏をせねば、明日はいよいよ総攻撃をするぞ」という返事を齎されたそうである。けれどもこの日も遂に暮れて、降伏どころか城を枕に討ち死にの覚悟と見えた。



（河野主一郎の書）

（―以下次号―）

―たるみず春秋―

置配に添書きのあり冬温し

保久上光昭

用事を済ませて帰宅すると、玄関に宅配の荷物が置いてある。ちょっとの留守の間に訪ねて来たらしい。荷物にはボールペンの走り書きが添えてある。「お留守でしたので置いときます」の文字が跳ねている。彼らの忙しい中での心配りを思うと同時に、年末まで無事故で配達してくれるのを願った。

（季語：冬温し・・冬）

（文章：瀬角龍平）